

複合文化学通信

第4号

(2007年1月15日発行)

早稲田大学 教育・総合科学学術院 教育学部
複合文化学科「複合文化学通信」編集部

(編集責任 / 福田育弘)

「教室の外で楽しんでいることを、教室の中で学問にしておこう！」

今回は 高橋 順一〔たかはし じゅんいち〕先生の研究テーマは

「批判理論による現代の再検討」です。

私の研究の原点は「1968年」にあります。

当時アメリカがヴェトナムでおこなっていた「汚い戦争」に対し

全世界で若者たちを中心に反戦運動が展開されていました。

この運動は、やがて既存の政治・社会・文化全体に対するラディカルな異議申し立て・反乱へと発展します。

パリでは五月革命が、アメリカではコロンビア大学やUCバークレーで、

そしてわが国では東大や日大を中心として大学の秩序を根底から揺るがす学園闘争が勃発しました。

私は当時受験を控えた高校3年生でしたがこの運動の核にある「思想」に強い影響を受けました。

目の前にある現実を既成の価値観や世界観から決して見てはならないこと、

この世界には社会的地位や財産を得ることなどよりはるかに大切なことがあること、

つねに現実を批判する精神を持ち続けること、

こうしたことを私は《68年》から学びました。

そしてこのことは今の私の研究活動の核心をなしています。

私の研究の柱となっているのは、17世紀の西ヨーロッパで生まれ、その後世界全体をのみこんでいった

「近代」という歴史性を批判的にとらえ返すという課題です。

私たちが今当たり前のように受容している「社会」「経済」「市場」「所有」「自由」「主体」「理性」「芸術」と

いった概念はすべてこの近代という歴史性が生み出したものです。

そしてこうした近代の現実が空気のように自明なものとして私たちのものの見方を支配しています。

しかし、近代がこうした自明性を獲得するまでには長い格闘の歴史があり、

さらにこの自明性を決して

許そうとしない少数の思想家たちがいました。その代表がマルクスでありニーチェであり、

さらには私の主要研究対象である20世紀ドイツのフランクフルト学派の思想家たちでした。

私は、みなさんとともにこのフランクフルト学派の理念的指標でもあった「批判」という視点から

近代の現実をとらえ返す課題を探索し続けたいと思っています。

高橋順一先生のゼミ（学際コース「現代社会演習」）でまなぶ
学生のみなさんの【研究テーマ】を
高橋先生から紹介してもらいましょう。

私が学際コースの「現代社会演習」を担当するようになってから、多くの学生諸君が、
私の演習から巣立っていきました。

彼らはじつに多様なテーマに取り組んでいました。パリの都市文化をあつかったKさん、
自分自身の現地でのボランティア体験をもとにユーゴスラヴィアの内戦問題をテーマにしたEさん、
平和論について自身の考えを展開したNさん、アメリカ留学をはさみ2年がかりでフランスの思想家
フーコーについて論じた卒論を完成させたTくん、東ヨーロッパのサッカー事情を検討したIくん、
など思い出せばきりがありません。

留年を重ね卒業が危ぶまれていたKくんは、日本のパチンコ業界の裏表についての体験（！？）を
まじえたユニークな論文をまとめました。いろいろなテーマをとっかえひっかえ渡り歩きながら最後
に民俗学というテーマにいきついたNくんは今故郷で国語の先生をしているはずです。

私はこうした多くの学生諸君の演習での発表、討論、卒論指導、おりおりの飲み会などで貴重な耳
学問をさせてもらうとともに、演習という相互コミュニケーションの場がもつ苦楽をたっぷり味わう
ことが出来ました。これからもそうした体験を学生諸君とともに重ねて生きたいと思います。

つづいて、「**東アジア大衆文化論と多言語間コミュニケーション**」を研究テーマにしている
村上公一〔むらかみ きみかず〕先生です。

私の研究テーマは大きく分けて二つのものがあります。

一つは東アジアにおける大衆文化の型の形成とその越境現象に関するもの、
もう一つは情報化社会における外国語習得と多言語間コミュニケーションのあり方に関するものです。
一見かけはなれたテーマに見えますが、実は近年における大衆文化の越境現象は通信技術の急速な発展
にともない生じたものであることを考えると、私の興味はつねにテクノロジー、コミュニケーション、
カルチャーといった言葉の周辺をさまよっていることになります。

村上先生のもとで（学際コース「現代社会演習」）まなぶ 珍田礼一郎〔ちんだ れいいちろう〕さん
（学際コース4年）の卒業論文のテーマは「**適正化規定廃止と変容しつつある理美容文化**」です。

新聞社への就職が内定している珍田くん。

帰省のたびに通う地元の「床屋さん」の何気ないひと言から、
都市部を中心とした低料金の「カット専門店」の急速な拡大と、
それにとまなう理美容文化の変容について考えてみようと思い立った。
「カット専門店」利用客へのアンケート調査、大学生へのアンケート調査、
理容師へのインタビュー調査などを踏まえ、
今まさに論文の形にする、生みの苦しみを味わっている。

「こんな科目、こんな内容」

今回はみなさんが入学してすぐに履修することになる、1年次の必修科目のひとつ「**複合文化学テーマ演習**」を紹介します。

「複合文化学テーマ演習 1～12」は、半期2単位の科目です。

前期に6科目、後期に6科目おかれた計12科目のなかから、
最低2科目4単位を履修してください。

「複合文化学テーマ演習」はどれも興味深い演習ばかりなので、
自身の興味によって、さらにもっととってもかまいません。

みなさん、《演習》と《講義》のちがい、わかりますか？

ある辞書では、《演習》は「ゼミナール」、《講義》は「大学における授業」と説明されています。

英語に直ただけではますますわからなくなるだけですし、《講義》が「大学における授業」ならば、《演習》も大学でおこなわれているので、《講義》の一部（部分集合）となってしまいます。「なんじゃこれ」って感じですね。手短かに説明しましょう。

《演習》とは、学生が主役になる授業形態です。

一つのテーマについて学生が発表し、発表後には、他の学生たちが質問したり、意見をいったりします。教師は議論が混乱したときのとりまとめをしたり、授業の最後に発表を講評したり、発表を補足したりします。

要するに、みなさんが思う存分、発言できる場です。学生と学生、学生と教師の間で、いわゆる双方向の情報交換がおこなわれるわけです。したがって、教室内の座席は円形ないし、四角形に配置されるのが通常の形です。それに対して、

《講義》とは、教師が主役になる授業形態です。

原則として、教師が一方向的に話します。みなさんは一方的にそれを聞き、ときにメモをとり、ときに質問をします。みなさんが授業で獲得できる知識の量は、《講義》のほうが多いかもしれませんが、双方向性はあまり高くない。教室内の座席は、教壇の前に、教壇に向かう形で一方向に配置されているはず。高校や予備校と同じですね。

さて、今回の本題に入りましょう。

「複合文化学テーマ演習」は名称が示すとおり、《演習》のひとつです。

「ひとつです」と書いたのは、複合文化学科には、もうふたつ《演習》があるからです。

2年生と3年生のときに履修する「外国語演習」と、3年生および4年生で履修する「複合文化学演習」がそれです。「外国語演習」については、すでに「複合文化学通信」の第3号（前号）で説明しました。あるテーマについて、ドイツ語・フランス語・中国語・ロシア語・スペイン語という外国語で情報を収集し、理解を深めるというのが「外国語演習」です。また、「複合文化学演習」については別の号で説明します。

簡単にいえば、履修する学年が異なっています。つまり、

**「複合文化学テーマ演習」は
一年生を対象にしています。**

「複合文化学テーマ演習」では、「たとえば」みなさんが日々接しているファッションを手がかりにして授業を進めます。古代原始社会における衣服でも、中世封建社会における衣服でもありません。今の衣服です。

なぜか？

みなさんがすでに一定の予備知識をもっていること、みなさんが「これは勉強だからつまらなくても我慢して学ぼう」と考えることなく、自分から「これって前から私が興味をもってたことだ!」と感じてくれる「テーマ」であること、この2つの条件がととのうと、《演習》が楽しくなるからです。

みなさんが発言し楽しく議論しているうちに

問題が明確になり、さらに授業の最後で先生が雑然としているようにみえた授業の内容に形を与えてくれます。みんなでひとつの結論に到達するのです。やったね！

さらには、「複合文化学テーマ演習」は1年生向きの授業ですから、文献の読み方、資料の集め方、発表資料の作り方、発表の仕方、ディスカッションへの参加の仕方、PCソフトの使

い方、レポートの書き方なども勉強することができます。

その意味で、「複合文化学テーマ演習」は4年間の大学生活を充実させるための滑走路だといってもいいでしょう。離陸のエネルギーとなるのは、《なによりも楽しく勉強する》ことです。

ちなみに、12ある「複合文化学テーマ演習」のテーマは以下のようなものです。

1. 映画のなかで飲食はどう表現されているか
2. ファッションと不在の身体
3. 中国 ざ・テレビジョン
4. 日常のなかにあるさまざまな差別に気がついてますか
5. モノの都市論
6. 〈歌〉に込められた思いを読み解く

—— 短歌からJポップまで ——

7. 舞台の美学 — 歌舞伎からミュージカルまで —
8. アヴァンギャルドと非公式文化
9. 〈他者〉発見のメカニズム
10. 越境する東アジア大衆文化
11. 映像にみるハイブリッド
12. この絵は美しい！？

さてつぎは、前号に引きつづいて1年の必修専門科目である「**複合文化学の建築物 II**」の内容を紹介しましょう。

この「建築物II」のテーマは「文化というハイブリッドー〈文化〉は雑多のものから引き算して作られるー」で以下の3つの問題系が取りあげられます。

「アジアンスブカルチャー

ー遅れてやってきた韓流現象」

「Americas という視点

ー単数のアメリカから複数のアメリカへ」

「映像・文学に見る亡命と離散

ー内なる異種混交が複合的な文化をになう」

今回はラテンアメリカの専門家で多くの訳書や著書もある 野谷文昭〔のや ふみあき〕先生から「映像・文学に見る亡命と離散 — 内なる異種混交が複合的な文化をになう」の具体的内容について説明してもらいます。

チカーノ・ロック

「ラ・バンバ」という曲があります。テレビのCMにもよく使われるので、聞けばああ、あれかと分かるでしょう。エレクトリック・ギターの歯切れのいいビートに乗って「パラ・バイラル・ラ・バンバ」というスペイン語の歌詞で始まるこの曲が日本でポピュラーになったのは、同名の映画のテーマとして使われたからです。

主人公は人気絶頂のときに飛行機事故で亡くなったアメリカのロック歌手リッチー・ヴァレンス。でも、本名はリカルド・バレンスエラ。父親がメキシコ系のいわゆる「チカーノ」なのです。それをアメリカ風に変えたわけで、ラテンとアングロの混淆〔こんこう〕といえますが、それ以上に興味深いのは、彼が歌う

「ラ・バンバ」。

もともと、メキシコのベラクルス地方の民謡なのですが、映画ではリッチーが国境を越えてメキシコに遊びに行ったときに酒場でそれを聞き、自分でロックにアレンジしたところ、大ヒットしたということになっています。

こうして生まれたのが新しい音楽としてのチカーノ・ロック。まさに混淆の産物ですね。

映画自体もチカーノ映画あるいはラティーノ映画と呼ばれたりしますが、ハリウッド映画にはこういうジャンルもあり、そこでは民族的マイノリティーが主流とは一味ちがった混淆的作品を作っています。英語に加えてスペイン語を学び、複合文化学の目をもつと、こういう作品にこめられたマイノリティーの複雑な心のひだが見えるようになるはずです。

「環境問題」という複合的な文化現象を考えてみよう

さて、複合文化学科では、文系と理系の学科・専修が併存する学部である教育学部にある利点を生かして、理系文系が協同して研究できる学際的テーマにも積極的に取り組んでいきます。

前号では、複合文化学科が情報教育に力を入れていることを紹介しましたが、今回は、環境問題を取りあげます。

環境問題は、生物学や地質学などの自然科学から、経済学や政治学などの社会科学や、地理学や歴史学などの人文科学が協力してこそ、その複雑な全体像が明らかになる領域横断的で複合的な問題系です。

何年か前から世界的に関心の高まっているこの環境問題について、複合文化学科の前身となる学際コースでは、関連した科目や演習をおいてかなり積極的に取り組んできましたが、複合文化学科でもそれらを引き継いでいくことになっています。

理学科に生物学専修と地球科学専修があり、さらに社会科に社会科学専修や地理歴史専修がある教育学部では、それらの専修の先生方と協力して、いくつか環境をテーマにした講義がもうけられています。

たとえば、

2年から履修可能な「複合文化学特論」には、

「環境政策について考える」

「多様な観点から考える環境論の課題」

という2つの環境問題に関する特論があります。

「環境政策について考える」では、

「地球環境の問題について、生物学的・地球化学的視点、環境・公害問題の社会的・法的側面、環境にやさしい有機農法の実践例など、多面的に考察し、環境論の課題を検討します。」

また、「多様な観点から考える環境論の課題」では、

「科学・技術の発達と利用が、いかなる社会・経済・政治制度上の諸要因により、オゾン層の破壊から廃棄物棄却による汚染まで、今日みられる多様な「環境問題」を発生させるのか、そのメカニズムを社会諸科学の成果に学びつつ検討し、良好な環境を保全し、回復・形成するための手がかりを、法と政策の動態を分析することを通じて明らかにしていきます。」

このほかにも学際コースの科目である「環境経済学」や「環境社会学」などの講義の継続が予定されています。

また、3・4年の演習には、

「複合文化学演習 8 I II III IV」「社会と環境」

「複合文化学演習 9 I II III IV」「生命と地球」

2つの演習があります。

「複合文化学演習 8」では、

「地球規模で環境の問題を考察する。自然環境と人の生活のありようを歴史的、地域社会的に検証する作業をふまえ、今後のあり方を探ることに重点をおきます。そして、さまざまな環境問題を、自然と人間の在り方から、根本的に生態系のなかでの人間活動として総合的にとらえていきます。また、土地、森林、水資源などの自然環境、および都市化や社会経済的背景などの問題と、アジア・アフリカなど各地域における課題を明らかにします。」

「複合文化学演習 9」では、

「地球という複合的なシステムとそこで暮らす生物に関して、めざましく進展している生物学や地球科学をはじめとする自然科学的な視点を軸に、環境や生命に関して、人文科学や社会科学の視点も交えながら多面的に考察します。」

もちろん複合文化学科の学生は、教育学部の他学科・他専修の科目も、それらが他の学科の学生にオープンになっていれば、自由に履修可能ですし、またオープン化されている他学部の科目も履修可能です。

それらの科目のうち環境に関係のある科目をみずから選んで履修することで、特定領域についてより高度な見方を身につけることも可能です。

fukugou-bunka@eiga

このコーナーでは、文化の複合性が描かれていたり、問題にされたりしている、いろいろな映画を紹介していきます。

初回はアメリカ映画です。

《Black and White》 1999 年 アメリカ映画

ジェームズ・トバック監督

出演：スコット・カーン、ブルック・シールズ、ロバート・ダウニー・ジュニア、クラウディア・シーファー、フィリップス・ビジュ、マイク・タイソン、ジャレッド・レト他

日本では劇場未公開ですが、DVDでレンタルできます。

日本でもB系のファッションが定着していますね。その源流はもちろん、ニューヨークのヒップホップです。そんなヒップホップ文化が、黒人に憧れる白人学生の視点と、黒人自身の視点をまじえながらテンポよく描かれていきます。

お金持ちの白人の予備校生たちは、黒人に魅力を感じ、黒人のラッパーたちとつきあい、その文化を模倣しています。一方、黒人たちは、闇の世界で暗躍し、貧困から抜け出すため差別を受けながらもヒップホップ文化の柱であるラップによって成功を勝ちとっていきます。

ヒップホップ界では、圧倒的に支持されている元プロボクシング・ヘビー級チャンピオンのマイク・タイソンが、なんと実名で登場しています。また、元スーパー白人モデルのクラウディア・シーファーも人種問題で論文を書いている学生役で登場しています。

ヒップホップ自体が、アメリカの大都会で暮らす黒人たちの作りだした複合的な文化ですが、それがさらに白人に模倣者を生んでいくというあり方が、ヒップホップな臨場感で映像化されています。まさに、文化の複合性の問題をテーマにした映画といえそうです。

DVD版には、監督による自作の解説もついています。多くの場合、状況だけを設定してセリフを役者たちのアドリブにまかせたことや、本当のラップのスターが偶然参加してくれたことなどを語っているほか、複合的な文化論としても興味深い発言が満載されています。(F)

第5号は2007年1月25日に発行予定です。

(背景画像：フランス、パリ市ヴォージュ広場、©2007 I. Fukuda)